

アフリカの人々と名付け 5

詩としての名前、記号として名前

小馬 徹

アフリカの幾つかの民族には、「叙死名」、即ちこれから名付けようとする赤ん坊の死に多少とも直接的に言及するタイプの名前が見られる。一方、童名として、おぞましい名を選んで「死」またはその送り手である神や魔の手を逃れようとする慣行は、アフリカばかりかかなり広く世界に見られるものである。では、「叙死名」をこの慣行に照らして解釈することが、何処まで妥当なのであろうか。

この点をもう少し立ち入って検討するために、西ケニアのキプシギス人の事情を参照しよう。

キプシギスの「印付きの者」

独立の前後まで、アフリカでは何処でも乳幼児死亡率はきわめて高かった。

キプシギスでは、ある子供が夭逝した後に誕生した子供には、「印付け」と呼ばれる特別の長生儀礼と耳朶に特殊な傷（印）が施された。この儀礼を受けた子供は特別の装身具と名前を貰い、「印付きの者」と呼ばれる特殊なカテゴリーに括られた。他の者は、彼らを傷つけないように細心の配慮をする義務を負った。なお、私が印付けされた子供を最後に見たのは、1979年のことである。

母親は出産の忌みが明けると、すぐにこうした赤ん坊を土豚の掘った穴、道端、露地の土埃の中など特別の場所に連れて行って置き去りにした。これを、既に閉経した老女が拾いあげて連れ去り、暫く経ってから母親の許に届けたのである。老女と赤ん坊は、生涯、

儀礼的な母子関係を保った。

土豚の古い巢穴にはしばしばハイエナが住んでいた。死の最大のエイジェントは地下に住む死霊で、地下ではハイエナの姿をしていると信じられて来た。道端もハイエナが徘徊する場所であり、土埃は死骸が埋められる地下を暗示する。つまり、「印付きの者」とは、既に一旦死の手に引き渡された者であり、また子供を産むはずのない閉経した老女が生んだ子供として、二重に刻印された存在なのである。

ハイエナ、犬と呼ばれる「印付きの者」

印付けされた赤ん坊には、「土豚の子」、「穴の子」、「道端の子」、「拾い子」、「捨て子」、「人ならず」などの童名が与えられた。しかし、親はその名を明かさず、ただ「ハイエナ」、「犬」、「獣」、「肉食獣」と呼んだ。即ち、印付けられた者は、あたかも存在しないかのように扱われたのだ。

同様の慣行は、ケニアのカレンジン語系諸民族やグシイ人、テソ人にもある。また赤ん坊を氏神の社に続く十字路に置いて他人に拾わせる儀礼的な捨て子慣行は、大分などでは戦後まで見られた。豊臣秀吉は、五十三歳で得た初子鶴松に同様の儀礼を施して、その呼び名を棄丸と決めている。その夭逝後に生まれた秀頼も同様に遇し、お拾いと呼ばせた。これらに類するものは、キプシギスの「印付きの者」の名前にも見られる。

死を叙することと、黙すこと

さて、ここでニョロやテンボの「叙死名」とフルベ、キプシギス、日本の死をやり過ごす命名とを比較すると、両者の間には明確な対照があることに気付く。後者では死は儀礼的に暗示されるが、死への多少とも直接的な言及は強い禁忌となっていそうだと——ただ、フルベには「死なない者」という例外はある。

小川は、「叙死名」の宗教的儀礼に特に強く注目している。だが、文化人類学者リーチが述べた通り、禁忌は言語・心理・社会の三つの側面に同時に作用する。度重なる子供の死に直面する時、ハッキリその事実に言及して詠嘆するか、あるいはそれを抑圧するかによって、社会・心理的な作用にもきわめて大きな差異が生じると考えられる。

創造された文と、定型的な文

もう一つ注目しなければならないのは、「叙死名」が短い名詞ではなく、通常の文によって構成されていることである。

先に兄弟姉妹が幾人も死んで、初めて生き延びた赤ん坊に、つまり「叙死名」、ルグバラでは「墓」、テンボではカシワというお決まりの名が付けられることが一応期待される。だが、ほとんどの場合赤ん坊の母親とその姑が相応しい名、つまり「叙死名」を作り出す。そして、死をやり過ごすお決まりの名が短い名詞であるのに対して、「叙死名」は大概、通常の文である。

因みに、ナプシギスを初めとするカレンジン語系の諸民族でも、兄弟姉妹が死んだ後に生まれた子供に与えられる名前は、幾つかの既成の定型化した名前に限られ、「印付け」儀礼によってほぼ自動的に決まる。フルベでもほぼ同じ事情であるらしい。

このような相違には重大な意味がありそうだ。梶茂樹は、テンボでは名前の基礎的性格

はメッセージ性にあり、且つ一回的な創造性にあると述べた。そうである限り、テンボの母親が子供の「叙死名」に悲劇的なコメントを付けた事実は重い。我々は、その名に潜む深い情動と濃密なメッセージを読み取るべきである。

詩としての言葉と、記号としての言葉

感情の吐露と秘匿、言葉の創造とその形式への黙従とは、別の二つのことだ。言語作用と心理的効果ばかりでなく、社会に及ぼす影響も全く異なるものになる。小川による「叙死名」の宗教的機能の指摘は正しいとしても、この場合、「叙死名」の創造的メッセージが持つ社会的機能を合わせて考察する必要がある。

ここで、柳田國男が何処かで述べた事を思い出す。日本の家庭でも嫁姑は構造的な対立関係にあるが、弱い立場の嫁にも内面に蟠る姑への反発を吐露する公式の機会があった。つまり、田植え歌など大勢の人が掛け合いで歌を歌う時に、嫁は即興的にそのような歌詞を創作して歌うことが出来たと言うのだ。この場合に限り、姑も決して嫁を咎めず、自分も歌で応酬したのである。

発話としての歌あるいは詩は、時に、特別の社会機能をもった発話形式であり得る。そこに、この問題を解く鍵がありそうだ。

つまり「叙死名」を持つ社会は、人の名前を自他を差異化する記号として扱う以上に、その形でしか伝えられない悲痛なメッセージを運ぶ詩として扱っているのではなからうか。そして、そのメッセージは神にと同時に、いやそれ以上に特定の個人や社会に向けられていると思われるのである。——デュルケムが明察した通り、神とは社会が個人を超えて生み出す偉大な創発的作用に他ならない。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)